

「最後に残るもの」を大切に

愛知教育大学 久野 弘幸

貝ボタン工場

先日、奈良県のある小学校をたずねていく途中、懐かしい道を通りました。私は、教員養成時代をキャンパス内で鹿が草を食む奈良教育大学で送ったのですが、その道は、「家庭科教材研究」のグループ研究で「貝ボタン工場」の見学に行ったときに通った道だったのです。

どのような経緯で、私たちが「貝ボタン工場」に目をつけたのかは、今となっては記憶がないのですが、ワイシャツなどに使用されるボタンが貝で作られていること、海のない奈良で貝の加工がなされていること、そして当時、韓国製の貝ボタンに国内市場が席卷されていることなど、工場見学を通して驚かされることばかりでした。それまでに何度も通りながら気にもとめなかった地域が、貝ボタン工場の見学後は、一つの特徴を持った地域として浮かび上がってきたことを 20 年近く経った今も実感を持って思い出します。

「はい回っている」としか見えないことが問題

さて、昨年末の二つの国際学力調査(OECDならびに IEA による)から文部科学大臣の発言を経て、「学力低下」をめぐる論争がにぎやかですが、この手の「論争」でいつも心に引っかかることがあります。それは、「ゆとり教育になってから学校が・・・」とか「学力をしっかりとつけるには・・・」など、学校段階や地域性を考慮しない雑ばくな論議や冷静な分析に欠ける議論に対して感じる引っかかりです。その中には、バランスを考慮した幅の広い「学力」を見ずに、いわゆるペーパーテストでとらえる事柄に限定した旧来の「学力観」の土台に立って論じるものも少なくありません。

社会科の歴史を少しでもかじったことがある人ならば、「はい回る経験主義」という言

葉を耳にしたことがあるでしょう。この言葉を総合学習の殺し文句のように使用するのを耳にしたことがあります。その批判者にはどのくらい子どもの学ぶ姿をとらえる力があるのでしょうか。旧来の学力観を今も引きずりながら、その目で目の前の子どもをとらえて批判しているとすれば、「はい回っている」としか見えないその目の方が問題だといえます。

「原点」に返る文化

テレビの人気番組「何でも鑑定団」に出演する骨董鑑定士の岩崎紘昌氏は、ラジオの対談で「原点に返る文化」の大切さについて語っています。最先端のモノや新奇性のあるモノに高い価値を置く昨今の文化に対し、「物やそこに流れている時間を大切にする文化」や「古い物の良さを感じる心」の価値を説きます。元々生活の中にあつたものを見直し、そのよさ(価値)をかみしめたいうで、再度現在を見つめ直してみるといいます。そうすることによって、自分自身の来し方に思いをさせ、今後の進む方向や価値が一層明確になってくるといいます。

私たちは、何のために若い頃より教職の道を志したのでしょうか。私たちの教師志望の原点は何だったのか、今一度思い起こしてみたいものです。その原点は、自分の小学校や中学校時代の経験の中に、あるいは教育実習で出会った子どもの姿の中に埋め込まれているのではないのでしょうか。自分自身の教職志望の原点を見つめ、原点回帰してみる。そうして長い間にたまったホコリを払い落とし、「最後に残るもの」を大切にして、子ども達の前に立ちたいものです。回帰できる原点を持つ教師は、多少の政策の揺れで、「ぶれる」ことはないのだから。

学期研究会

「今日の学力低下論を切る!!-見える学力と見えない学力を考える-」

【期日】平成17年2月26日(土)

【会場】上智大学7号館 14F会議室

【午前】

◎開会行事

◎講演 講師 毎日新聞社 藤原 尚美
テーマ「アメリカのチャータースクールはどのような学力を育てようとしているのか」

◎討論会

上智大学教授 加藤 幸次先生

東京学芸大学教授 浅沼 茂 先生

立教大学教授 奈須 正裕先生

愛知教育大学 久野 弘幸先生

テーマ「見える学力と見えない学力」

【午後】

◎実践報告と討論

「学校の教育課程を通してどんな学力を育てようとしているのか」

コーディネーター

立教大学教授 奈須正裕先生

◇実践報告1 千葉県北条小学校

◇実践報告2 愛知県卯ノ里小学校

◎講演

「今求められている学力とは」

講師 国立教育政策研究所部長

高浦 勝義先生

◎閉会行事

◎講演 毎日新聞社 藤原 尚美先生

テーマ「アメリカのチャータースクールはどのような学力を育てようとしているのか」

実際に我が子を1年間チャータースクール(以下CS)に通わせ、またご自身もボランティアで教えられた経験に触れながら、アメリカのCSの現状を話された。

カリフォルニア州では、CSの目的を①よりよい子供の学びのため、②学ぶ機会を増やし、達成度が低い子供の学びを豊かなものへ③多様で独創的な機材を奨励④教員がスキルを高める⑤公教育の範囲内で、さまざまな学校の選択を可能にする⑥学びの成果(学業成績)に結果責任を負う⑦公教育システムに刺激を与え、各学校が切磋琢磨すると規定している。

CSの形態と学力の比較にも触れられた。CSの中にもいろいろ形態があるが、一般的にCSの新設校でクラスルームがあると学力は高



く、クラスルームのない学校は学力が低い傾向があるそうである。

お子さんを通わせていたイーグルピークモンテソリースクールは、1年から5年まで137人の児童で、モンテソリ教育を採用している。教育理念は、子供は「知りたい」「伸びたい」という6歳にして哲学者たる存在である。大きな概念から小さな事象へ、また、「文化学習」と呼ぶ世界と自分とのつながりを意識して学習を進め、大人はその自発的な学習をサポートする。また、学習時間より活動の内容を重視し、子供なりの学習ペースを尊重している学校である。その中で人間は、一人一人個性をもった大切な存在であることを理解し、学校生活を送ったそうである。

(文責 太田 始)

◎討論会

上智大学教授 加藤 幸次先生

東京学芸大学教授 浅沼 茂 先生

立教大学教授 奈須 正裕先生

愛知教育大学 久野 弘幸先生

テーマ「見える学力と見えない学力」

「もっと時間がほしかった。」「三人のパネラーの話を、もっと聞きたかった。」こんな思いを持った方が多かったのではないだろうか。

感想を端的に言えば、非常に茫洋とした表現で恐縮であるが、「教育に関する「哲学」や原理を考えること・求めることの大切さを改めて強く思った」、ということになってしまふ。因みに、三人の先生方のお話の中で特に印象深かったのは、「今回の「学力低下論」「ゆとり教育批判」は、昭和20年代の久保舜一の調査の時と同様で、原因となる事実と結果について一切検証のないまま、「事実」がマスメディアによって作られている」、「授

業に大切なのは”密度”である。指導する内容を教師自ら身をもって学び直し、”気概”を持って授業にのぞむ、といったことの大切さを問い直したい」「今、世界のいくつもの国々で、見えにくい学力を見る努力をし始めている。その中で、日本の伝統的な授業研究プロセスの中で個の育ちを見取るという手法も注目されている。見える学力だけが特化されているわけではないのが、”世界”の現状である。」であった。

是非またこのような企画を計画して頂けたらと期待している。



最後に、三人の先生方に関する簡単なお紹介をさせていただきます。

浅沼先生の論文『『学力』はほんとうに下がったか？—国際比較調査から—』が、『世界』2000年5月号に載せられています。

「学力問題」に関する多くの論文で、参考文献としてよく紹介されています。

奈須先生の「自己紹介兼「私的」教育心理学のすすめ」を、もう御覧になりましたか。インターネットで、「奈須正裕」で検索すると見つけることができます。未だの方は是非一読をお勧めします。

久野先生のそもそもの御専門は、ドイツ・ヨーロッパ教育だそうです。『ヨーロッパ教育 歴史と展望—EUによる新しい試み—ヨーロッパ教育』を歴史と授業分析から探求』という御著書があります。現在は、幼児・児童の社会認識（市民意識）形成に関する研究も主な研究分野とされているそうです。

(文責 池田伊三郎)

◎実践報告と討論

「学校の教育課程を通してどんな学力を育てようとしているのか」

コーディネーター

立教大学教授 奈須正裕先生

◇実践報告1 千葉県北条小学校

「北条プラン」で育てる学力とは



戦後間もなく「コア・カリキュラム」の作成に着手し、独自の教育課程「北条プラン」の編集を継続し、現在は「北条プランⅨ」に至っている北条小学校から、その開発の歴史やプランの作成、目指す学力を具現化するためのカリキュラム編成の方針について、実践例をもとに、発表があった。北条小はすでに昭和39年頃細分化された教科学習で得た知識・技能を生活の中で統合する学習が必要と「統合学習」を位置づけ、T・Tやオープン教育に積極的に取り組み、内外に発信してきた。そのもとになっているのは「プランの理念」であり、北条小の考える子どもに必要な学力である。現在はそれを「生きることに有能な子どもを育てる」～新しいコミュニティ形成者の育成～においている。このコミュニティの育成のために学校をあげて教科学習・統合学習（総合学習）を関連させ、生活の場面で生かせる学力をめざしている。・個人追求型の学習「マイプランタイム」も1年生から（提示された課題から選んで遊ぶ等）積み重ねたり、集団追求型の学習「アワープランタイム」のように全学年で取り組む（卒業式代2部）など、常に新しいコミュニティで出会う異なる価値観との調和をはかる能力を育てようと取り組まれていた。学級単位で取り組む委員会活動・「指導の平準化」のための資料管理室など新たな視点を与えられた。

(文責 加藤久美子)

◇実践報告2 愛知県卯ノ里小学校

「研究課題」を①問題解決の力を育てる

②個と集団の関わりを深める とし、その具現化のために、総合学習・教科学習・集団活動をどう構造化しているのか、評価活動の視点と具体的な手だてをどうたてているかを実践例から発表された。特に評価活動について、自己評価カードの構成を・選択回答（4観点に基づく内容）と・自由記述（思考判断の自由な表現）2種類にし、それぞれのよさ

をいかして両面から振りかえさせている。相互評価の場を通して、次の学習の方向性を見いだすために、付箋紙も活用している。〔おばあちゃんとの交流学习〕の実践例から、子ども同士の読みとりについて説かれ、自己評価の深まりをめざした・付箋紙の課題・中間発表会・ポートフォリオ検討会について子どもたちの取り組みや記録が発表され意見交換がされた。また、「にこにこ団」活動（集団活動）の課題を①自己評価の「活動に対する充実感のずれ」②教師自身の「評価に対する姿勢」におき、評価の客観性の問題点（量化できない項目など）について研究されている。



先生方の思考（研究の柱）が常に「評価の主体性とは」におかれているようである。研究の柱がしっかりされ、先生方の思いが伝わってきた報告から、卯ノ里小学校がこれまでに培ってきた「個性化教育」の「生きてはたらいっている力」が感じられた

（文責 加藤久美子）

◎講演

「今求められている学力とは」

講師 国立教育政策研究所部長

高浦 勝義先生

学力は「生きる力」であり、「関心・意欲・態度・」「思考・判断・」「技能・表現」「知識・理解」の4つの観点の力をつけることであり、教科・道徳・特別活動・総合的な学習



の時間の4領域で行う。ここから PISA の調査を見て、「学習到達度」調査の意味・テストの意義・「学力」とは何かと話された。PISA の調査の内容は違うが、目的は同じ「生きる力」をつけることである。結果は読解力のみ落ち込んでいるだけで、他の分野は有意な変化がない。点数や「位」という結果情報で見たのでは対策がなく、学習指導要領・教科書・授業などから予想点を考え、それに対する高低を考えることによって対策ができる。これからは学力を知識の習得量から、生きる力＝「自ら考え、自ら学ぶ力」を育てる必要があることと、問題解決学習が大切であると話された。そして、関心・意欲・態度等も目的要因として重視する。問題解決学習は評価の連続である。評価の3つの機能（指導と評価の一体化、自己学習力の向上、外部への説明責任）に向けた「問題解決評価観」を追求する。この場合「測定」と「査定」と「評価」を区別する。測定＝評価ではない。そして、絶対評価に向けた、達成目標としての評価基準とその実現状況を判断する具体的な評価基準より成るルーブリック（得点化指針）の作成を行う、「生きる力」の育成をフォローする「授業評価」研究の促進をする必要がある。（文責 加藤 勇）

72号の発送が遅れましたことをお詫び申し上げます。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115-0031 東京都台東区千束 4-29-5-1005
tel/fax03-3871-8789 庶務部長 高瀬雄二
e-mail yujitaro@yahoo.co.jp
全個連ホームページ
<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>

全国個性化教育研究連盟 第72号
平成17年5月21日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 中田 泰志